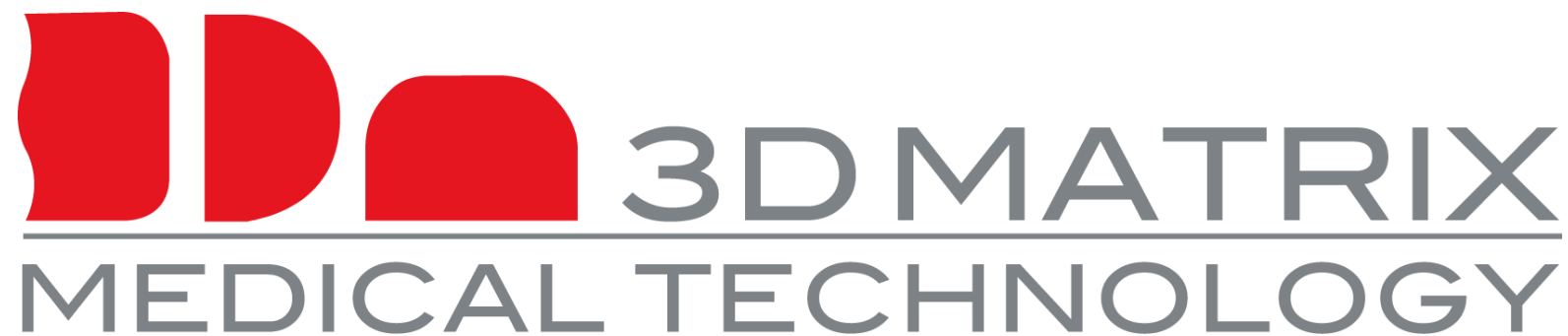




2025年度通期決算・中期経営計画説明会

株式会社スリー・ディー・マトリックス(証券コード:7777)

2026年6月

エグゼクティブサマリー

- ◆ 2025年度通期にて順調に成長が進捗し、黒字化を達成
 - ◆ 通期累計売上は108億円、前期比で+39.5億円/+57%
 - ◆ 通期営業利益は13億円、営業利益率12.3%、前期比+25.6億円
- ◆ 2026年度では引き続き米国が売上成長を牽引し、売上・営業利益共に順調な成長を計画
 - ◆ 売上は+26億円の134億円と計画
 - ◆ 継続的な成長のための投資を見込みつつも営業利益は2025年度より+3億円の16億円と計画

(単位:百万円)

	2025年度 通期実績	2026年度 通期計画	増減額	増減率
売上高	10,886	13,442	+2,556	+23%
営業利益	1,335	1,652	+317	+23%

1. 財務状況

2. 開発状況

3. 中期経営計画

4. ご参考:会社紹介

1. 財務状況

2. 開発状況

3. 中期経営計画

4. ご参考:会社紹介

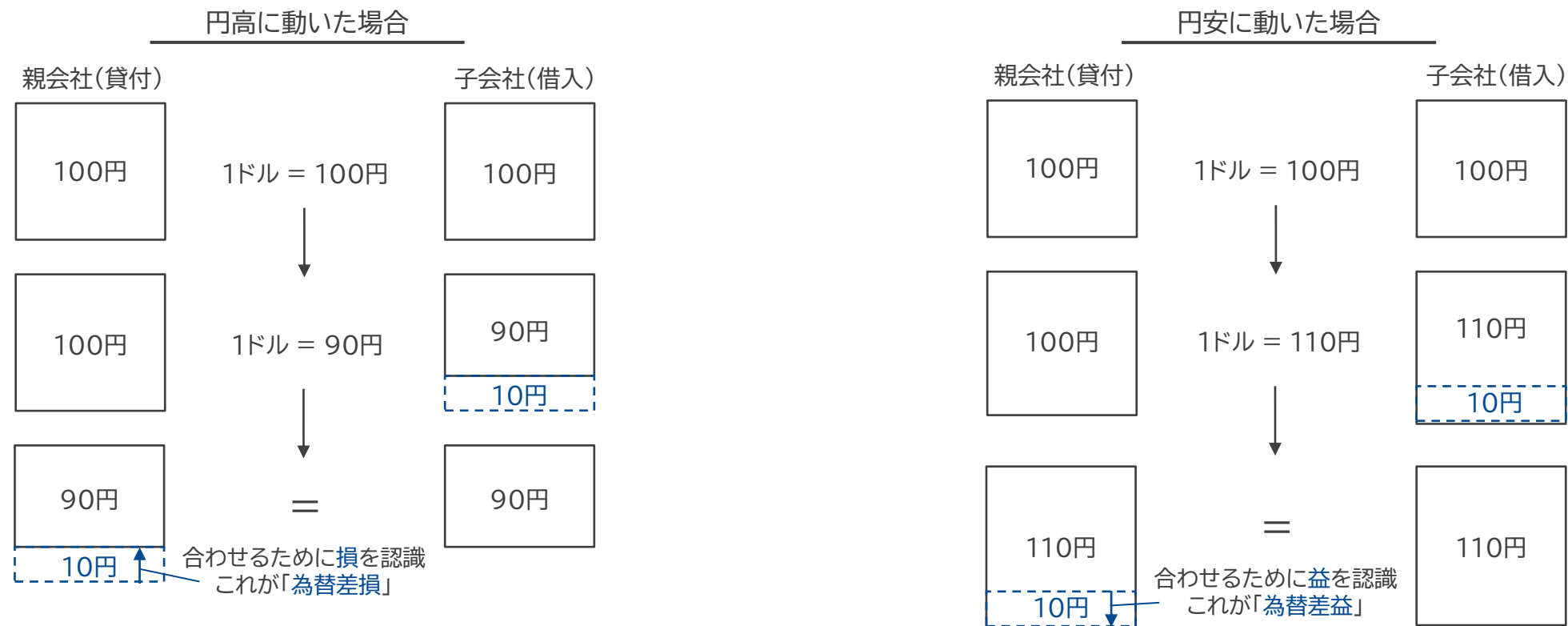
損益計算書の概要(2026年4月30日 時点)

(単位:百万円)	2025 Q4	2024 Q4	増減
売上高	10,886	6,934	+ 3,952
売上原価	2,314	2,509	△195
粗利益	8,572	4,424	+ 4,147
粗利率	78%	63%	+ 15%
研究開発費	640	498	+ 142
販管費	6,596	5,082	+ 1,655
営業利益	1,335	△1,156	+ 2,491

- ◆ 売上高は前期比57%増
- ◆ 2024年度の売上原価は製品・原材料の評価損が計上されており、2025年度は実質的には4億円弱の増加
- ◆ 上記故、粗利率は前期比15%改善
- ◆ 営業利益は前期比25億円改善し、13億円で着地

(再掲)為替差損益が発生する仕組み

子会社に対し外貨建てで貸付をしているため、為替レートの変動に応じて貸付金の金額が変動する。
変動した金額を為替差損益として認識している。そのため経常利益以下に為替に連動した変動が生じる。



財務諸表上の損益であり、事業上のコストの増減やキャッシュイン/アウトは発生しない

貸借対照表の概要(2026年4月30日 時点)

(単位:百万円)	2025 Q4	2024 Q4	増減
流動資産	9,179	6,418	+2,761
現金及び預金	2,830	1,580	+1,250
売掛金	2,731	1,970	+761
たな卸資産	3,146	2,674	+472
その他	470	194	+276
固定資産	616	94	+522
資産合計	9,795	6,513	+3,282
流動負債	2,956	1,578	+1,278
借入金	600	300	+300
その他	2,356	1,278	+1,078
固定負債(転換社債等)	43	2,718	△2,675
負債合計	2,999	4,296	△1,297
純資産	6,796	2,216	+4,580
負債・純資産合計	9,795	6,513	+3,282

◆ 売上増に伴い売掛金が増加。

◆ 転換社債の転換が進み固定負債は減少。

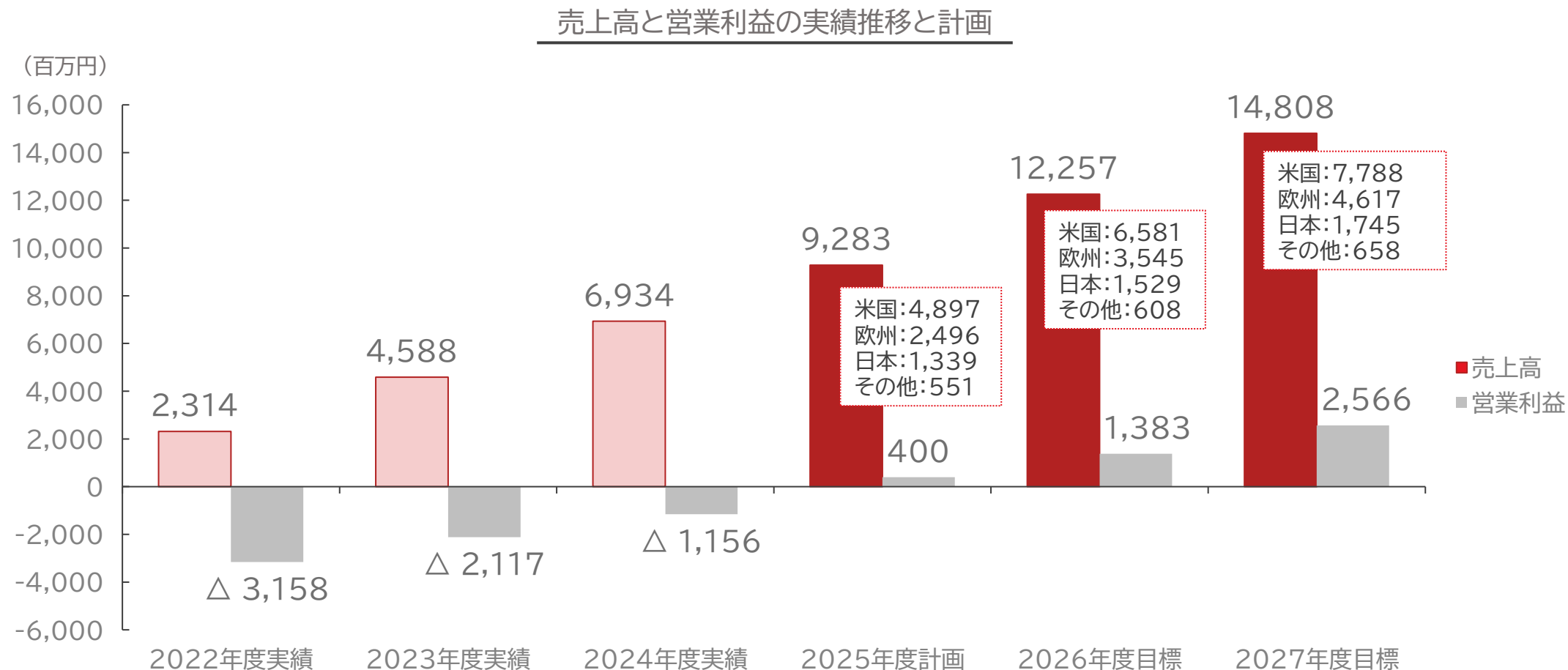
ファイナンスの状況

第9回無担保転換社債型新株予約権付社債(CB)は転換が進み2026年2月26日に残高がゼロに。

- ◆ 第9回CBは2026年2月末までに全ユニット転換
これによりすべてのCBの残高がゼロに。
- ◆ 第36回新株予約権の一部行使により、
2025年度 計4.9億円を調達。
- ◆ 地政学的状況に起因するリスクに対応した在庫積み増し等のため
三井住友銀行・りそな銀行より計3億円を追加借入。

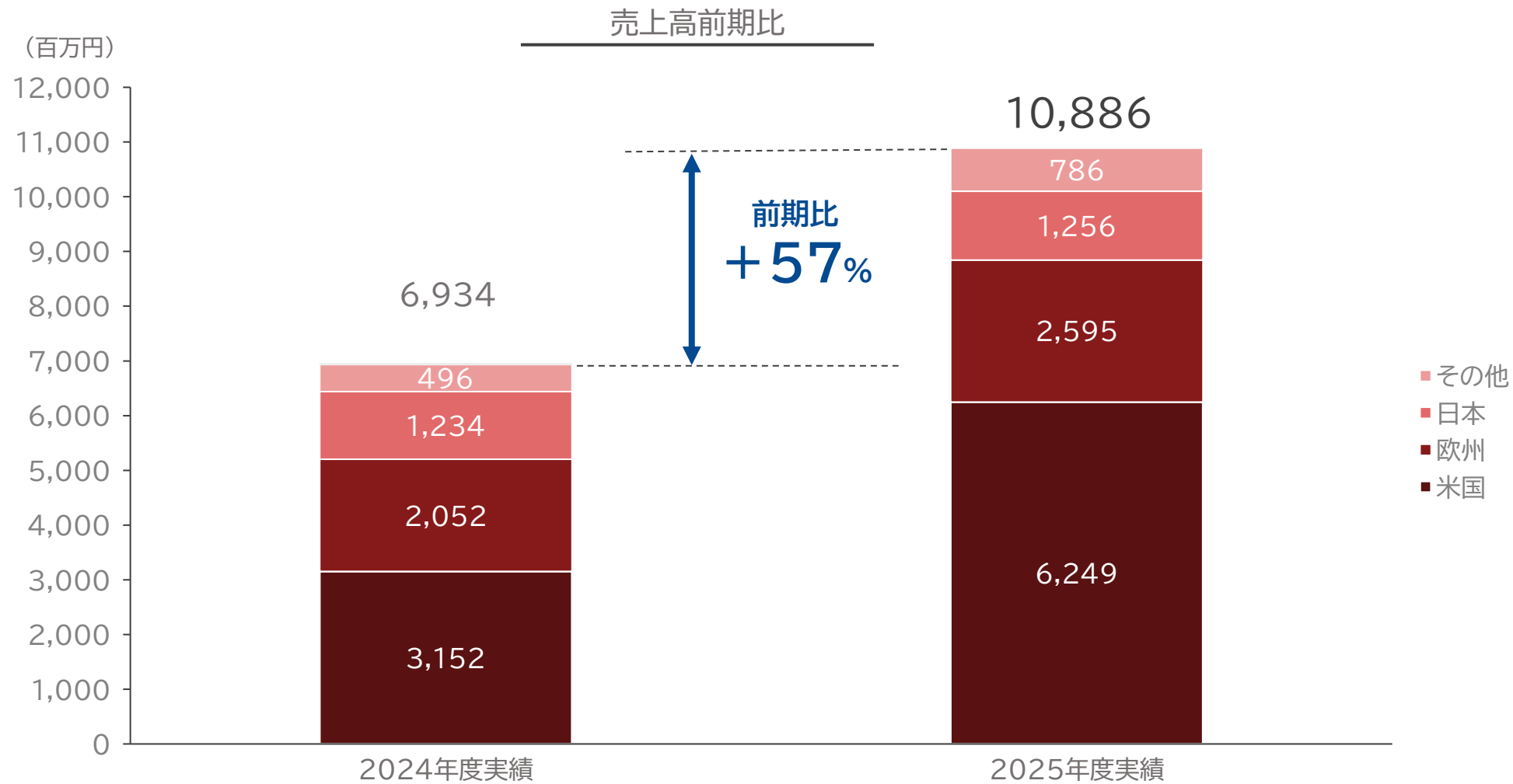
(再掲)実績推移と3か年の計画と目標

2025年度での営業黒字化を計画、その後、営業利益を拡大させていく目標。



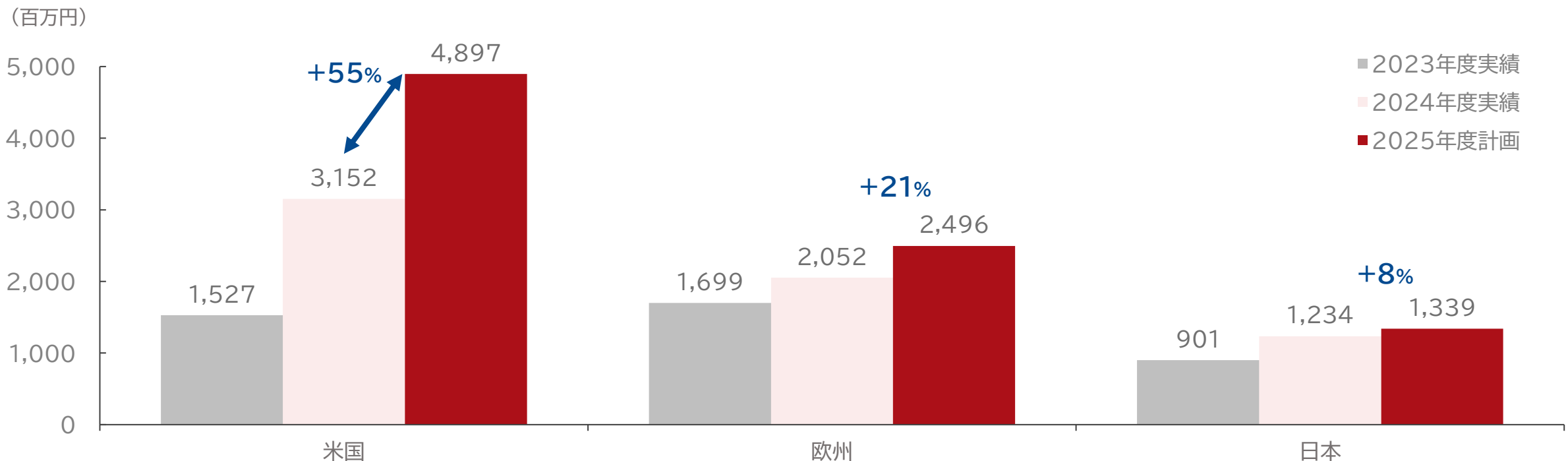
売上高前期比

特に米国での高成長が貢献し、前期比で売上は57%増。



(再掲)エリア別の売上計画

過去の成長も踏まえ合理的な売上計画を策定。今期も米国が成長に大きく貢献。



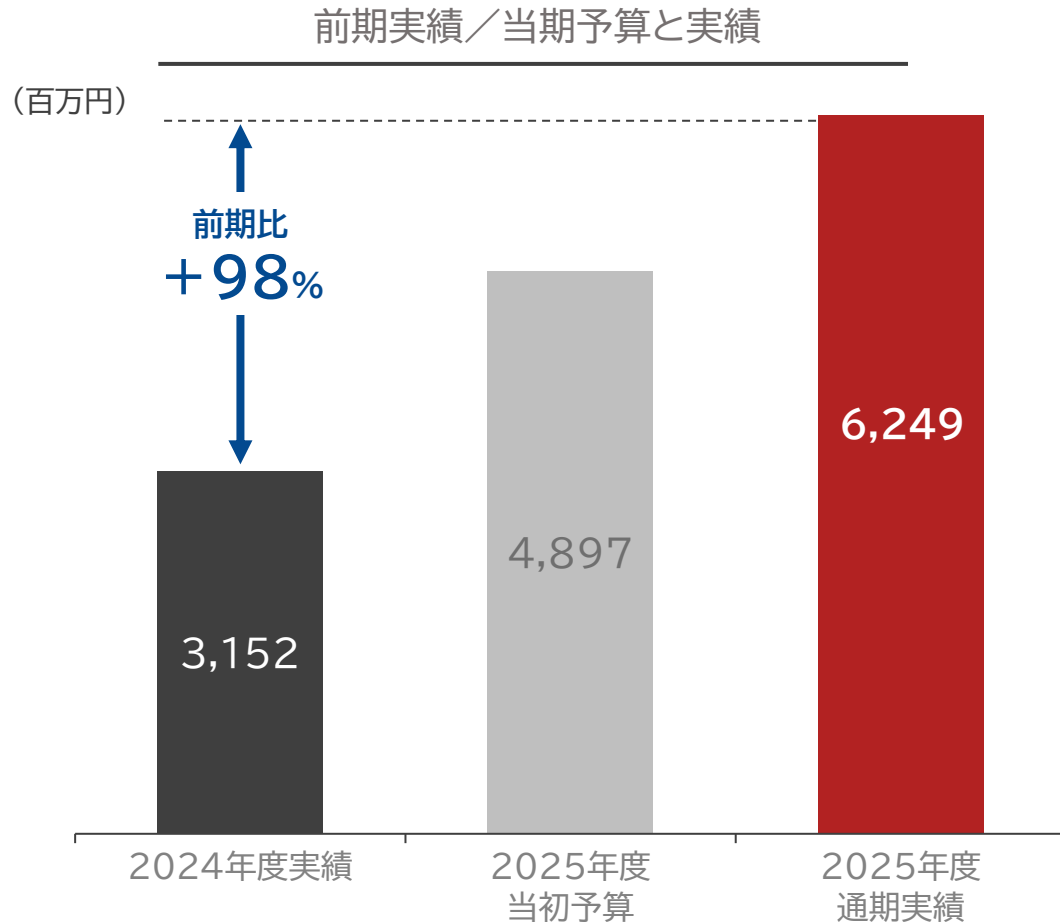
- 今期成長のための営業リソースは拡充
- 営業人員当たり売上高が維持される前提
- いまだ数倍の成長余地あり

- 大きな営業リソース追加を行わない
- ドイツなど2024年度に伸びなかった国は成長を実績まない
- 耳鼻咽喉科、泌尿器科領域での成長を継続させる

- 大規模病院のカバレッジは既に高い
- 新規顧客獲得による成長は縮小
- 既存顧客の使用本数を増加させる

販売活動の進捗：米国

Q4にもGI、ENT共に成長を継続したことで前期の倍近い実績を達成



消化器内視鏡領域(GI)

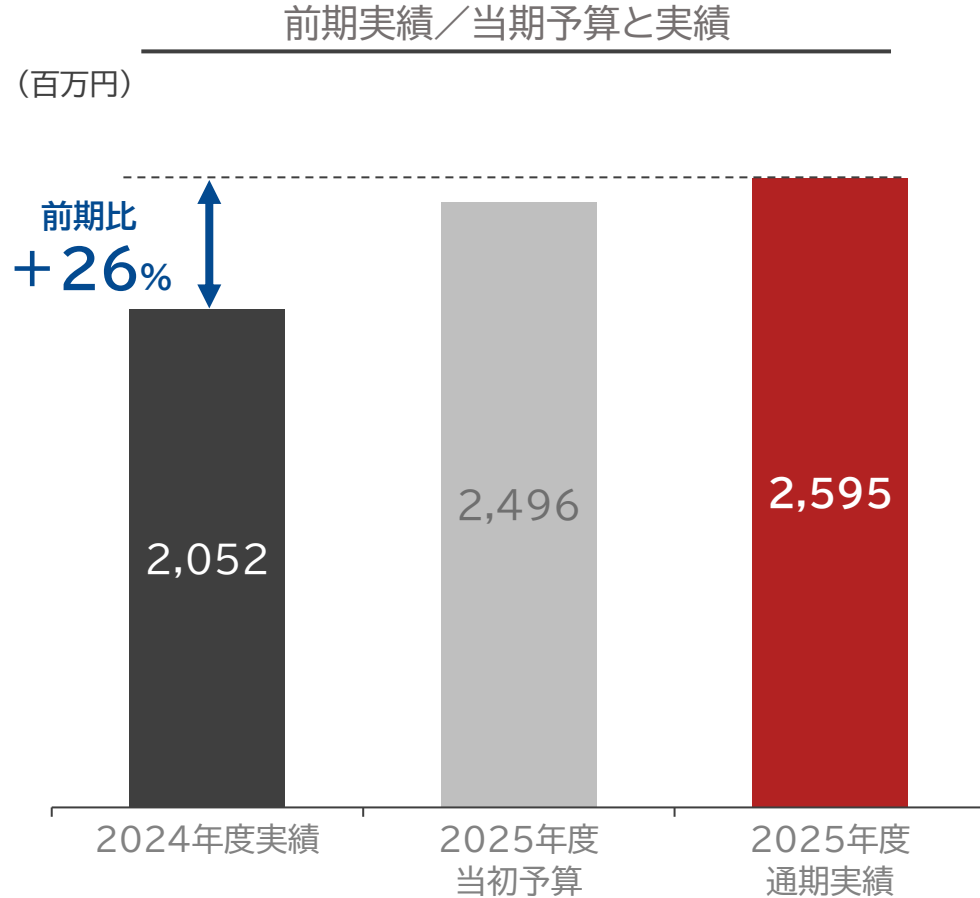
- 新規顧客の獲得、既存顧客の維持と顧客あたり使用量の拡大、それぞれのバランスを取った活動により成長継続に貢献
- 上記に加え、年度末に向けて営業活動が加速したことで前四半期以上の成長を実現
- 新たな取り組みとして、同一病院においてGI, ENT領域横断的な医師へのアプローチを開始；医師間の情報共有を通じた製品理解の進捗に寄与
- 依然として成長余地は大きい状況

耳鼻咽喉科領域(ENT)

- 事業規模の成長に対応してQ4に営業人員を増員
- 数量の増加に加えてASPも向上し、年間予算を大きく上回る結果を達成

販売活動の進捗：欧州

消化器内科は微増の一方、耳鼻咽喉科と泌尿器科での成長により前期から26%の成長を達成



消化器内視鏡領域(GI)

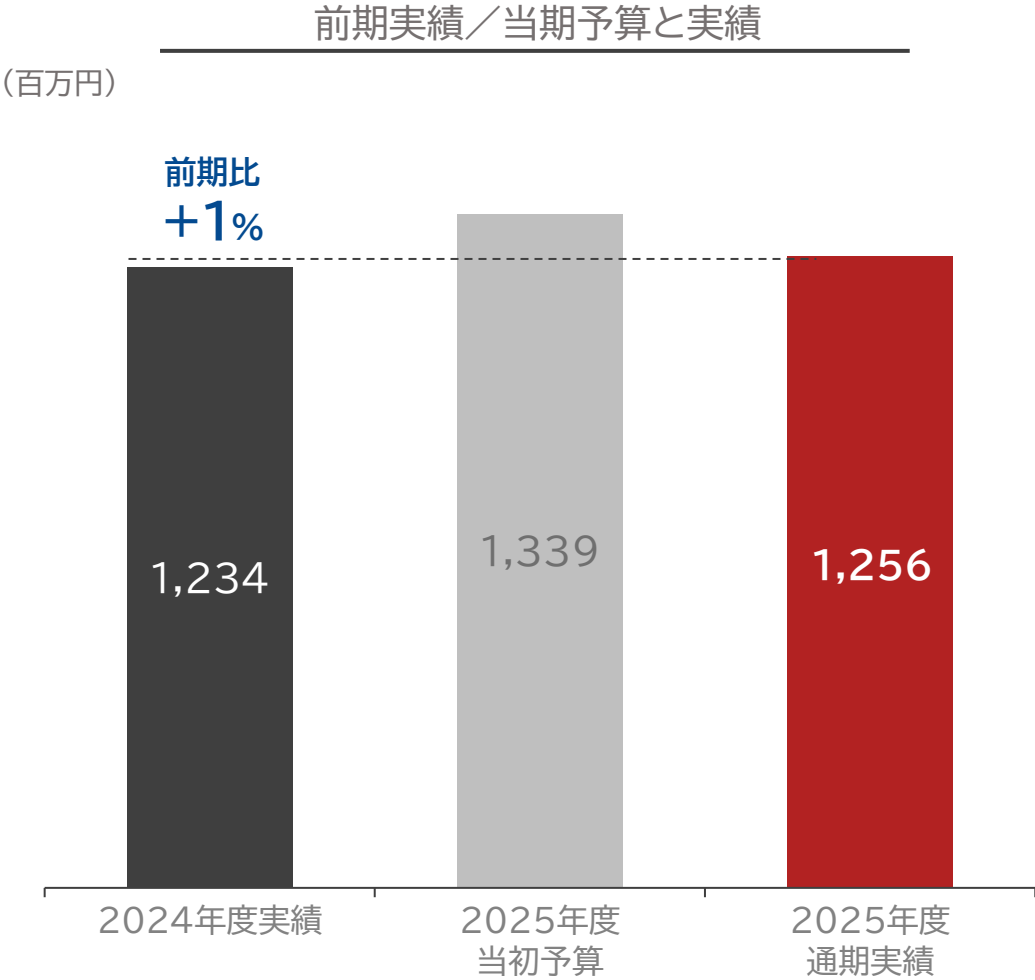
- 英愛ではPOPSや名古屋大の後出血予防の論文を周知徹底することで、各病院での使用量が増え、大きく躍進
- 独では改善施策が機能はしたが、施策の全国展開が想定通りに進まず、微増にとどまる

その他の領域

- 耳鼻咽喉科では、頭頸部領域の使用量が大きく拡大
- 泌尿器科では、放射性膀胱炎が入り口となり、前立腺肥大、腎臓部分切除などへ使用拡大が順調に進んだ
- 新製品承認に伴い、脳神経外科での説明会が順調に進捗。2026年6月より十数病院での試用を開始予定

販売活動の進捗：日本

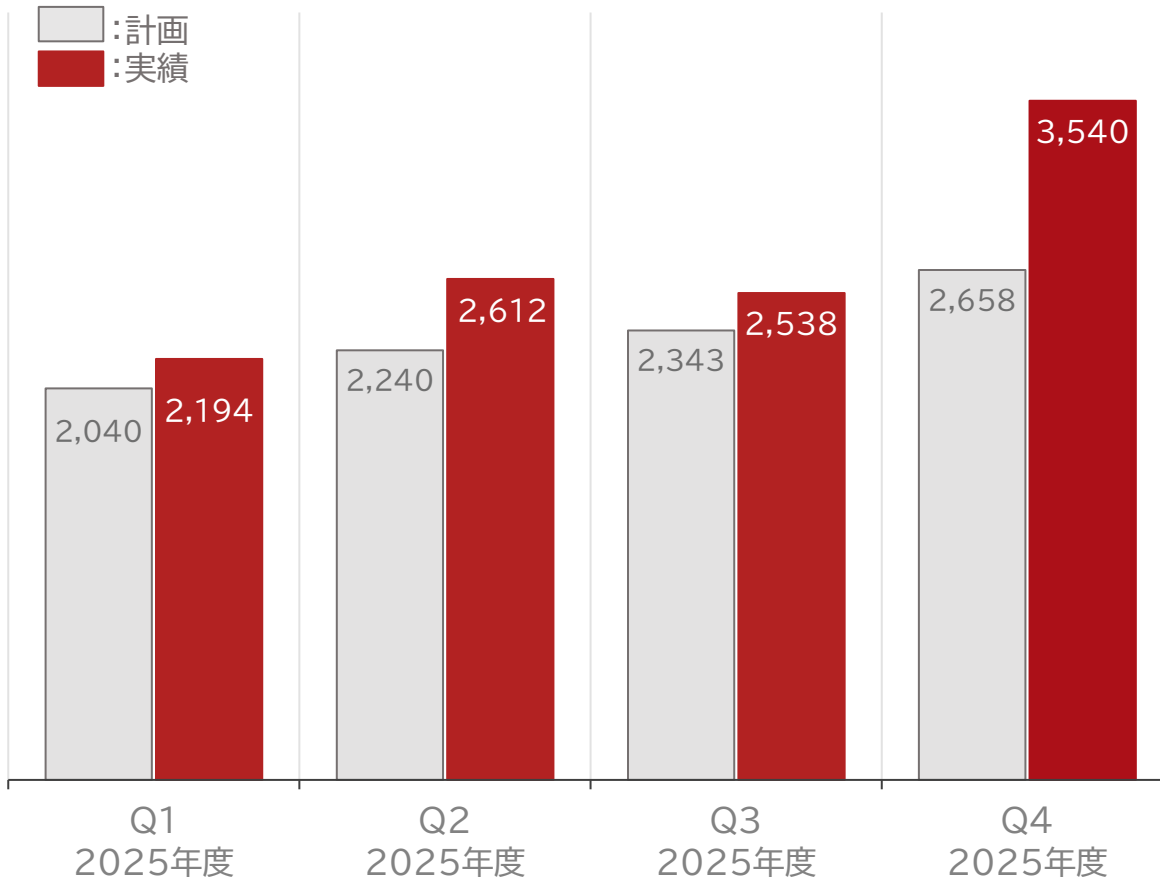
保険請求の問題で病院が買い控え、成長は停滞



- 当社製品の市場への浸透が進んでいるため、新規獲得顧客数が減少してきており、また、新規顧客の規模も小規模化している
- 病院からの保険請求が却下される事例が一部都道府県で散見され始めたため、病院での買い控えが発生
- 通期で僅かに前年を上回ったものの、予算は未達

四半期売上高(2025年度)

(百万円) 四半期売上高 計画と実績の推移



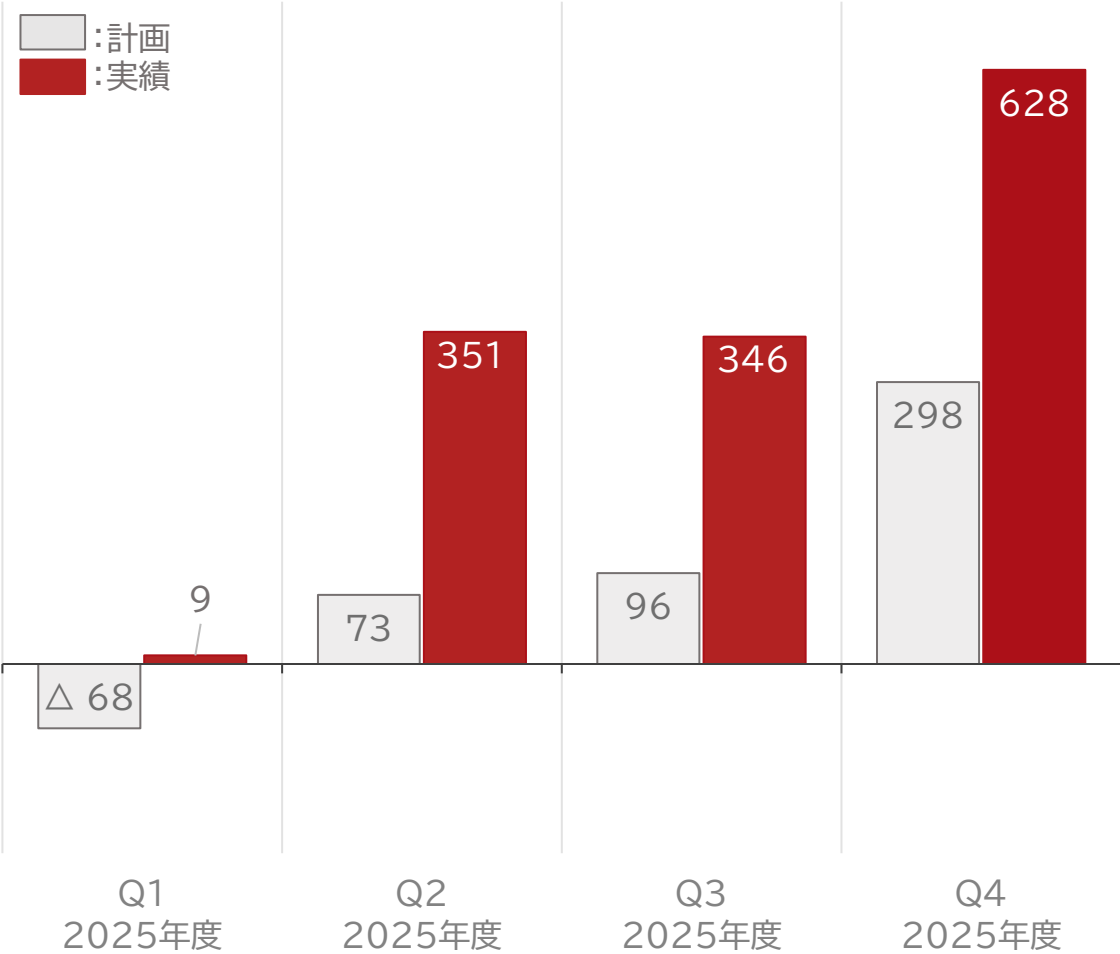
対計画(累計)

+16億円

- ◆ 引き続き米国での営業展開が順調に進捗しており、累計売上高は対計画で16億円、17%の上振れ。

四半期営業利益(2025年度)

(百万円) 四半期営業利益 計画と実績の推移



対計画(累計)
+ 9.3億円

◆ Q4の大幅な売上超過に伴い、累計営業利益は9.3億円計画を超過し大幅増益で着地。

1. 財務状況

2. 開発状況

3. 中期経営計画

4. ご参考:会社紹介

現在アクティブなプロジェクト(止血)

プロジェクト	ニーズと特徴	状況
小児の心臓手術の止血	小児向けに承認を受けている安全な止血材がない。塗布後に膨張せず、術後癒着が抑えられ、狭い領域でも視野が確保されることが臨床ニーズ。ピュアスタットは第一候補になりうる。	欧州、米国で承認申請準備中、欧州における臨床データ収集終了、解析中。
小児及び成人の扁桃腺手術後の疼痛軽減と止血	ピュアスタットによる止血は、焼灼止血に伴う組織障害を低減し、術後疼痛の軽減が期待される。扁桃摘出術後の出血と疼痛は、特に小児患者において临床上の大きな課題であるが、現在これら二つの課題を同時に解決できる製品は存在しない。	米国申請データ取得のための臨床研究を実施中。
オスラー病(HHT)の止血(鼻)	オスラー病は遺伝性の疾患で約8割は繰り返す鼻血をきたす。鼻血の止血処置は都市部の病院で対応するため、地方に住む患者は長時間かけて通う必要がある。在宅医療にてピュアスタットを用いることにより、患者QOLを向上させる。	欧州において臨床研究を準備中 米国においては既に承認を取得し販売中、十分な有効性が確認された場合には、HHT治療用製品としての申請を予定している。少数例のデータについて論文発表済。精度の高いデータを取得するためRCT計画中。
生検後の止血	経内視鏡の生検鉗子による組織採取では肺等部位によって出血した場合、有効な止血手立てがなく十分なサンプルの取得が困難。ピュアスタットはこれら止血困難な部位にて使用可能であり十分量のサンプル取得を可能とする。	米国承認申請準備中。
前立腺肥大手術の止血	ロボット手術で肥大部を削る際に出るウー징グの経尿道カテーテルによる止血。焼灼を減らすことにより術後に男性生殖機能を低下させることを防げる。	欧州で販売中。欧州で論文準備中(米国承認申請のため)。米国にて承認申請準備中

現在アクティブなプロジェクト(止血)

プロジェクト	ニーズと特徴	状況
放射線直腸炎の治癒	放射線治療の副作用。難治性の潰瘍と出血。現在は治療法がないアンメットの状態。ピュアスタットを塗布することで潰瘍の治癒が観察されている。	米国においては承認済で販売中。欧州の内視鏡学会で論文発表済。欧州ガイドラインにピュアスタット追加済。欧州での承認を目指し、欧州で臨床研究において症例蓄積中。
放射線膀胱炎の治癒	放射線治療の副作用。難治性の潰瘍と出血。現在は治療法がないアンメットの状態。ピュアスタットを塗布することで潰瘍の治癒が観察されている。	欧州で実施された臨床研究データが論文発表済。米国にて前立腺の止血と併せて承認申請予定。
脳外科における止血 (次世代止血材)	経鼻の内視鏡による脳手術において、焼灼以外で使える唯一の止血材となる可能性。当社が独自に開発した新規ペプチドを用いる。	2025年12月に欧州にて承認取得。脳神経外科、消化管、心臓血管、実質臓器等、複数領域において術中止血の適応を取得。米日での承認申請データ取得のためPMCF(市販後調査)を計画中。

現在アクティブなプロジェクト(創傷治癒)

プロジェクト	ニーズと特徴	状況
粘膜の創傷治癒	消化管、尿道、膀胱、鼻腔等の粘膜の創傷治癒材としての有効性はこれまでに様々なスタディで確認されている。薬事承認を得ることで拡販につなげ、また難治性炎症のさらなる症例蓄積につなげる。	米国はFDAとの協議により申請カテゴリを510K申請からDe Novo申請に変更して再申請準備中。欧州にて2026年3月に承認申請済。
炎症性腸疾患の粘膜の治癒	消化管の難治性炎症。原因不明で、一度発症すると再燃と寛解を繰り返し、生涯治療が必要となる特定疾患。現在多数の抗炎症剤が用いられているが、粘膜を治癒することで治療効果があがる可能性。ピュアスタートで粘膜の治癒を目指す。	米国にて臨床及び基礎データの収集を進め、ピュアスタートの作用機序の解明および治癒効果を検証する。群馬大学で 8例組み入れ済 。
食道狭窄予防	予防方法の確立していないESD後食道狭窄に対して、内視鏡的塗布による、防止効果を実証。後出血や瘢痕化による創傷治癒の遅延も抑制。	欧州においてレジストリー実施中。広島大学で実施した臨床研究データの 論文発刊済 。
嚥下障害予防	咽頭癌の抗癌剤/放射線治療後に実施する内視鏡下咽喉頭手術後の嚥下障害はQOLの悪化を招くが予防方法が存在しない。この嚥下障害に対し、内視鏡的塗布による予防効果を目指す。	広島大学、関西医科大学において特定臨床研究実施中。
口腔粘膜炎	がん治療における化学療法、放射線療法、および造血幹細胞移植で発生する口腔粘膜障害は著しくQOLを低下させる。ピュアスタートにて予防及び治療が期待できる。	米国では承認取得済で販売中。臨床研究計画。日本において臨床応用検討中。

現在アクティブなプロジェクト(再生)

プロジェクト	ニーズと特徴	状況
心筋機能低下の回復	注入型の心筋機能回復デバイスとしての開発を目指し、当社ペプチドにより心筋再生の足場環境を構築するとともに、幹細胞および成長因子タンパク質との混合注入による心筋再生の促進を確認した。	米国ハーバード大学より論文公開済。
骨充填材	当社ペプチドを骨再生の足場材料とし、患者本人の体液由来の成長因子を保持させることで低侵襲かつ注入可能な骨再生充填剤としての開発を目指す。歯槽骨再建にとどまらず、腫瘍切除後などの大型な骨欠損への再生材料を目指す。	既承認の骨充填材との併用も可能な移植担体として、米国での承認申請準備中。

現在アクティブなプロジェクト(DDS)

プロジェクト	ニーズと特徴	状況
既存薬剤のスローリリース	当社マテリアルを抗生物質やステロイド等の薬剤と混合することにより、持続的な薬剤放出が期待できる。適用範囲については耳鼻咽喉、消化管、心血管、皮膚領域等多岐に渡り、巨大な市場ポテンシャルを有する。	非臨床試験を進行中であり、幅広い薬剤との併用が可能なドラッグデリバリー担体として、米国にて種々の領域について承認申請検討中。
乳がんを対象としたsiRNAのデリバリー	がんの悪玉とされる「がん幹細胞」を抑制するsiRNAを、当社ペプチドでドラッグデリバリーすることで、腫瘍縮小だけでなく乳がんの再発や転移抑制にも寄与することも期待して開発中。国内治験において、ヒトへの安全性と腫瘍抑制メカニズム発揮を確認。	全身投与に最適化したDDSペプチドを開発中。トリプルネガティブ乳がんにおいて特に予後の悪いフェノタイプと、RPN2発現プロファイルの相関解明に向けた研究の実施を検討中。
悪性胸膜中皮腫を対象としたmiRNAのデリバリー	アスベスト(石綿)に暴露された後、数十年の潜伏期間を経て発症するがん。症例数は向こう10年間増え続けるとされている。発症後は薬剤療法に決め手がなく、非常に侵襲性の高い外科手術をしても予後が悪い。マイクロRNA(miRNA)を、画期的新薬として当社ペプチドでドラッグデリバリーして治療する。	医師主導治験(Phase 1)終了。主要評価項目(安全性の確認)を達成。 導出先のPURMX社によるグローバルPhase1/2企業治験準備中。国内において頭頸部癌に対する企業治験を実施中。
ワクチンのデリバリー	当社ペプチドと抗原(タンパク質あるいはmRNA)を複合した徐放作用をもつワクチンで、抗体価の上昇、単回投与での抗体獲得、炎症抑制に基づく副作用の低減をめざす。さらに、内包した抗原の安定性を高め、室温保存可能なワクチンとして輸送、貯蔵でのコールドチェーンを不要にできることも期待。	米国のワクチン開発企業、北海道大学と共同研究中。

現在アクティブなプロジェクト(その他)

プロジェクト	ニーズと特徴	状況
内視鏡用粘膜下注入材 (ピュアリフト)	消化器内視鏡的に腫瘍を切除する際、病変部を挙上させる目的で粘膜下に注入する。粘膜下注入後にゲル化するため、注入しやすく、治療中の粘膜切開・剥離によっても流出しにくいいため、腫瘍を切除しやすくなる。注入量や注入回数も減少できる可能性があり消化器内視鏡治療の質の向上に貢献できる。	薬事承認時の製造所との契約解除により、現在販売を中止している。製造開始に向けて検討中。米国において申請準備中。
放射線治療用吸収性 組織スペーサ	前立腺がんや子宮がんの放射線治療の際に、直腸へのダメージを減少させることを目的として、直腸と前立腺や子宮の臓器間に経皮的に注入される。当社ペプチドの生体分解性と高い生体適合性がニーズにマッチすると考えられる。特に子宮がんでは注入可能なスペーサは国内未承認であり、早期の開発が待たれている状況。	日本で大学と共同研究中。 動物実験終了。臨床応用検討中。

1. 財務状況

2. 開発状況

3. 中期経営計画

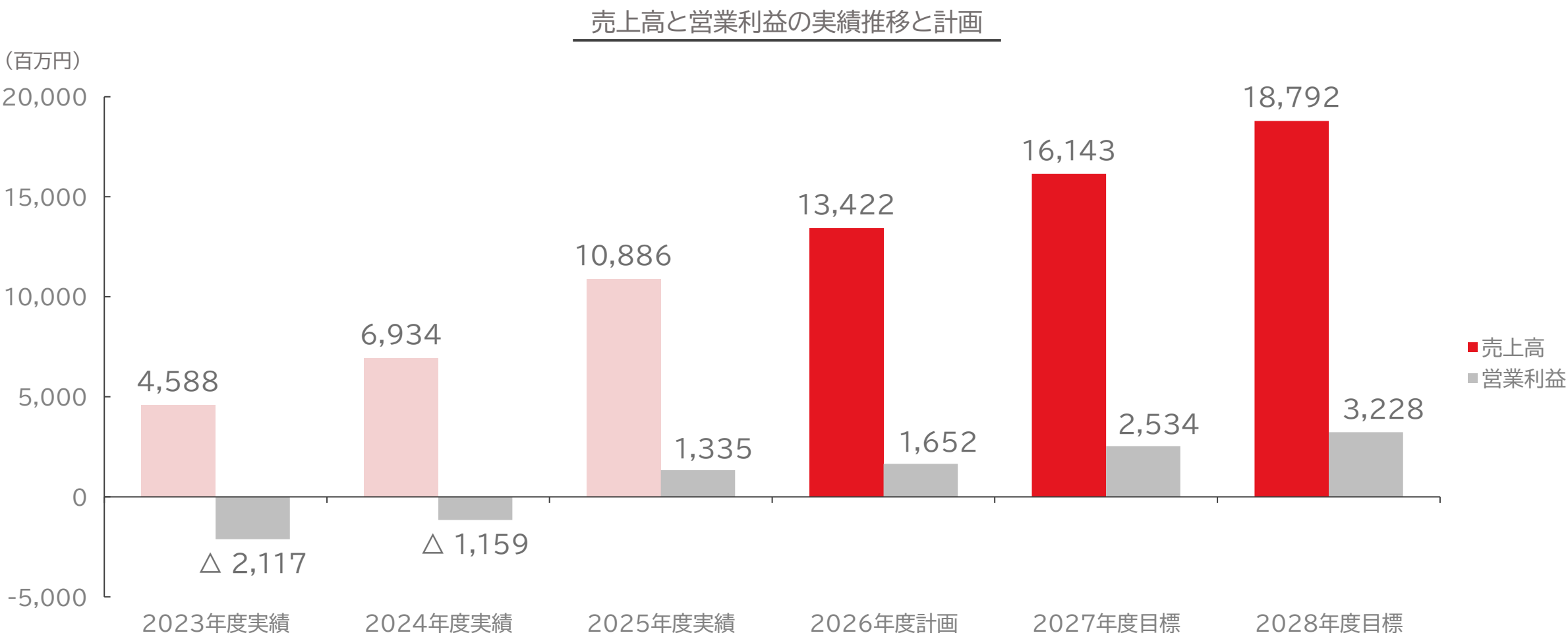
4. ご参考・会社紹介

中期経営計画の方針

- ◆ 特に米国GI市場にフォーカスした確度の高い成長を目指す方針は2026年度計画も継続
- ◆ GI以外の既存・新規分野に関しては保守的な期待値に留める計画
- ◆ 黒字化達成のタイミングを捕まえ、今後の継続的な成長実現に向けたチーム体制の強化、オペレーション力向上のための販管費の規律ある増加を許容
- ◆ 短期的な利益創出よりも中長期的な成長継続を優先しつつも、黒字化達成以降も着実な利益確保・拡大を指向
- ◆ 研究開発では引き続き大きな治験は計画しないものの、米国における新規承認取得の加速にグループのリソースを集中

実績推移と3か年の計画と目標

営業黒字化以降は、中長期的な成長継続と各年度の利益確保・拡大をバランスさせた計画を指向。



2025年度実績と2026年度計画の比較

2025年度実績に対し、2026年度計画は売上25億円増、営業利益3億円増となる計画。

< 2025年度実績と2026年度計画との比較 >

(単位: 百万円、%)	売上高	営業利益	経常利益	当期純利益
2025年度 実績	10,886	1,335	3,971	4,155
2026年度 計画	13,422	1,652	1,640	1,590
増減	+2,536	+317	-	-

- 売上高は25億円増加、23%成長
- 営業利益は3億円の増益を見込む
- 前期と同様に今後の為替の動向により経常利益、当期純利益は変動する可能性あり

※適用為替レート

【2025.4期実績】 USD:160,40円、EUR:187.36円、GBP:216.43円、SGD:125.31円、AUD:114.32円

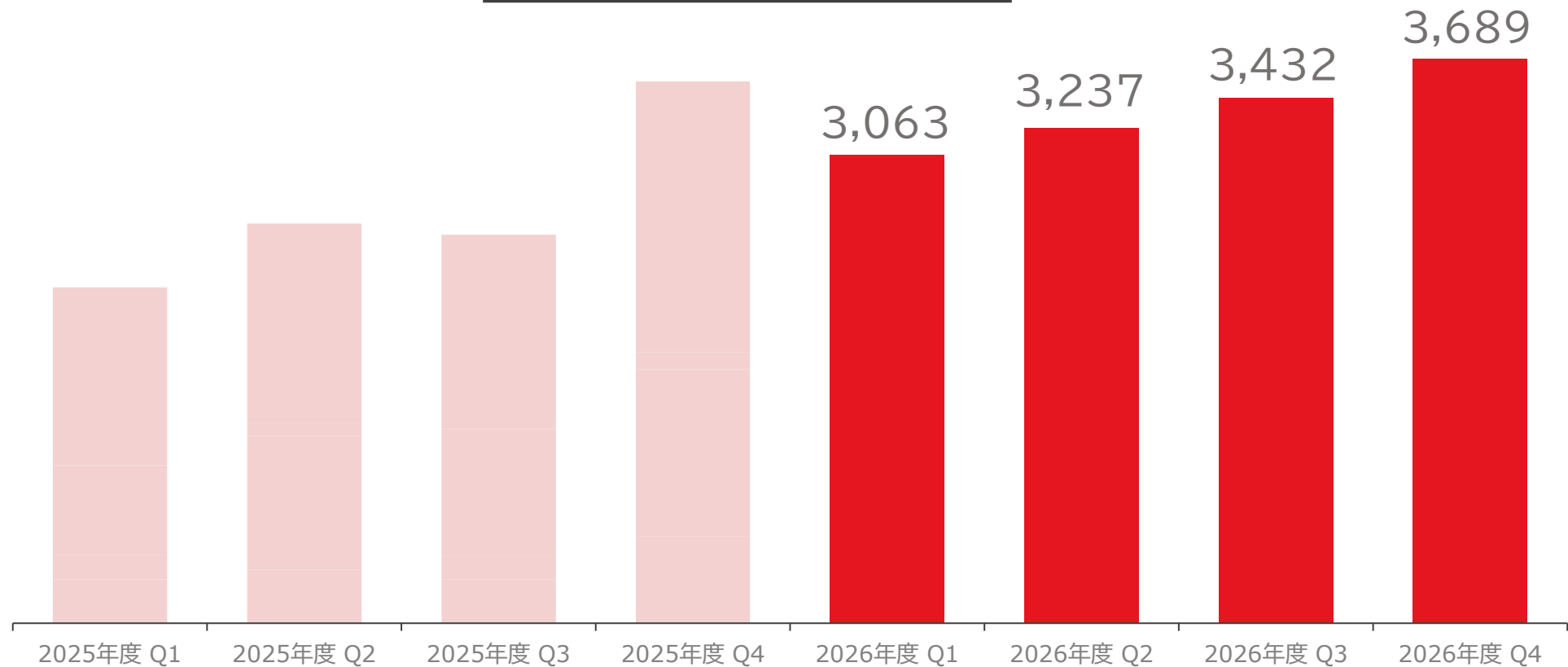
【2026.4期計画】 USD:160,40円、EUR:187.36円、GBP:216.43円、SGD:125.31円、AUD:114.32円

四半期売上高の推移

2026年度計画でも、四半期ごとに確実に前年同期を上回り、一貫して成長していく計画。

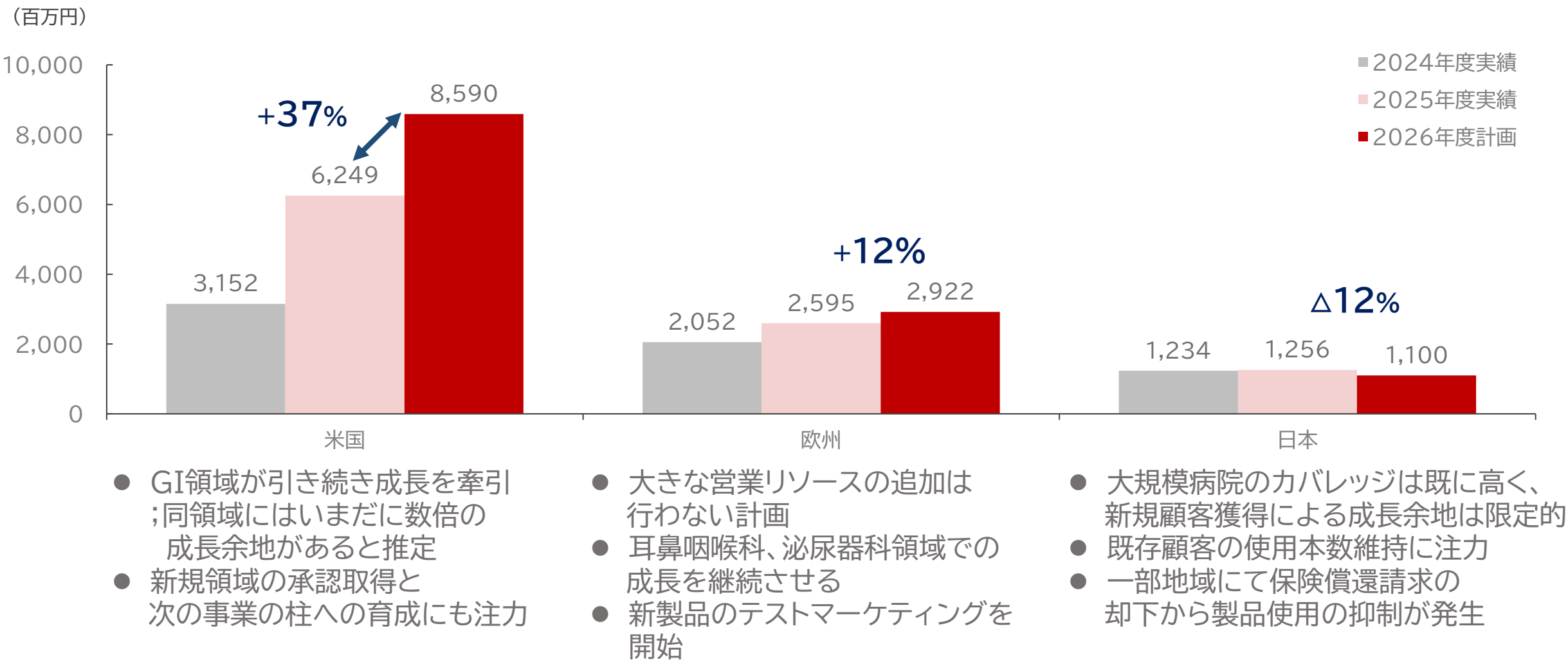
(百万円)

四半期売上高の実績と計画の推移



エリア別の売上計画

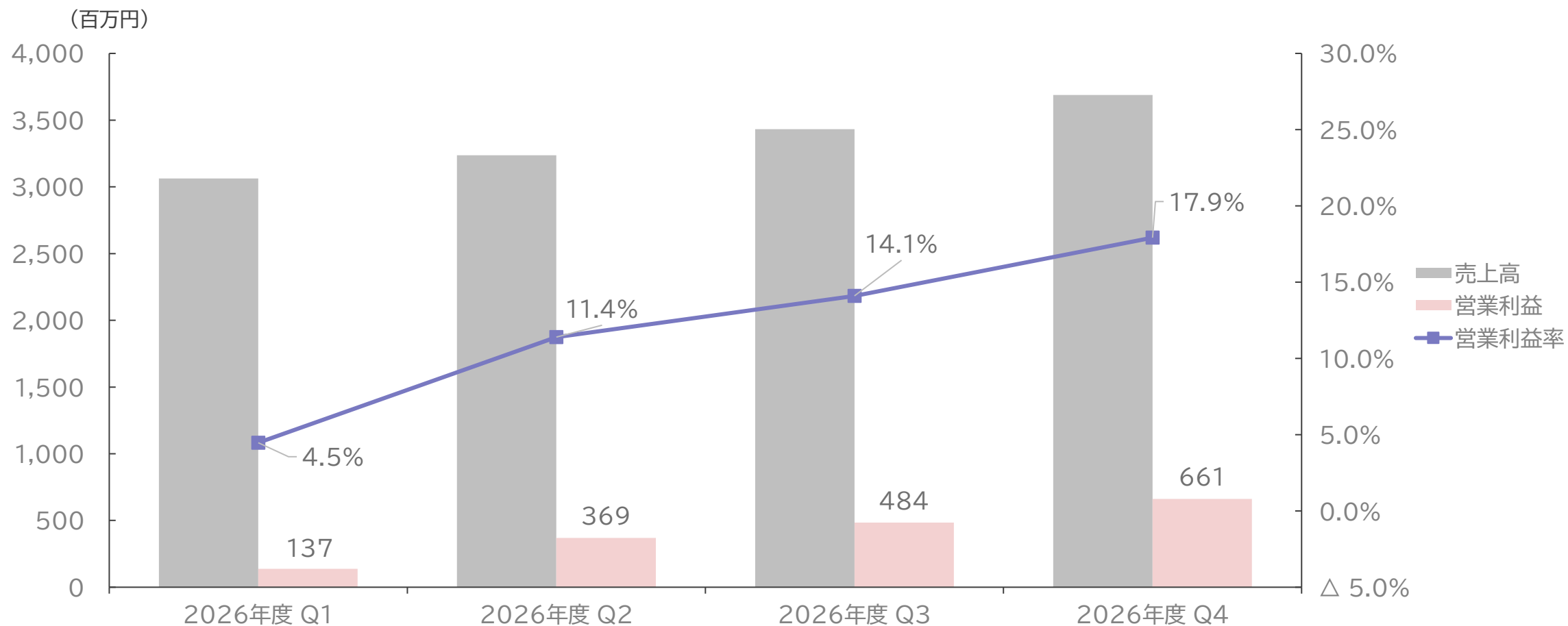
各エリアの状況を踏まえた合理的な売上計画を策定。今期も米国が成長に大きく貢献。



四半期営業利益推移

体制強化のための投資を踏まえ、急速な成長から安定的な成長へとシフト。

四半期営業利益の実績と計画の推移

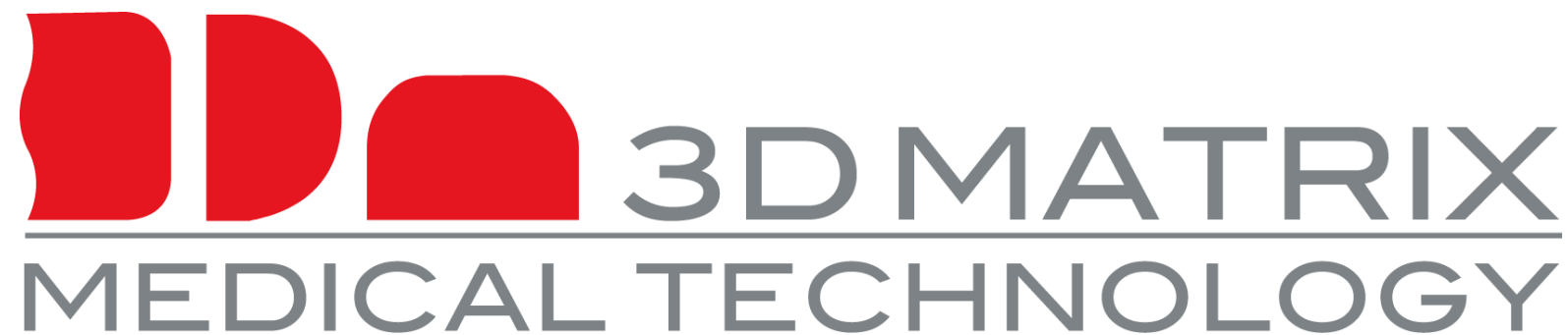


エグゼクティブサマリー

- ◆ 2025年度通期にて順調に成長が進捗し、黒字化を達成
 - ◆ 通期累計売上は108億円、前期比で+39.5億円/+57%
 - ◆ 通期営業利益は13億円、営業利益率12.3%、前期比+25.6億円
- ◆ 2026年度では引き続き米国が売上成長を牽引し、売上・営業利益共に順調な成長を計画
 - ◆ 売上は+26億円の134億円と計画
 - ◆ 継続的な成長のための投資を見込みつつも営業利益は2025年度より+3億円の16億円と計画

(単位:百万円)

	2025年度 通期実績	2026年度 通期計画	増減額	増減率
売上高	10,886	13,442	+2,556	+23%
営業利益	1,335	1,652	+317	+23%



ご清聴ありがとうございました

1. 財務状況

2. 開発状況

3. 中期経営計画

4. ご参考:会社紹介

MIT発ベンチャー企業

コア技術である「自己組織化ペプチド技術」は、マサチューセッツ工科大学(MIT)の研究者により、1990年代に発明された。当社の前身となる3-D Matrix(米国法人)はMITとMITの研究者が2001年に創業。

■会社名

株式会社スリー・ディー・マトリックス

■設立

2004年5月

■上場取引所

東証グロース市場(証券コード:7777)

■事業内容

自己組織化ペプチドをプラットフォームとしたグローバルな医療機器の開発、製造、販売

■代表取締役社長

岡田 淳

■事業所

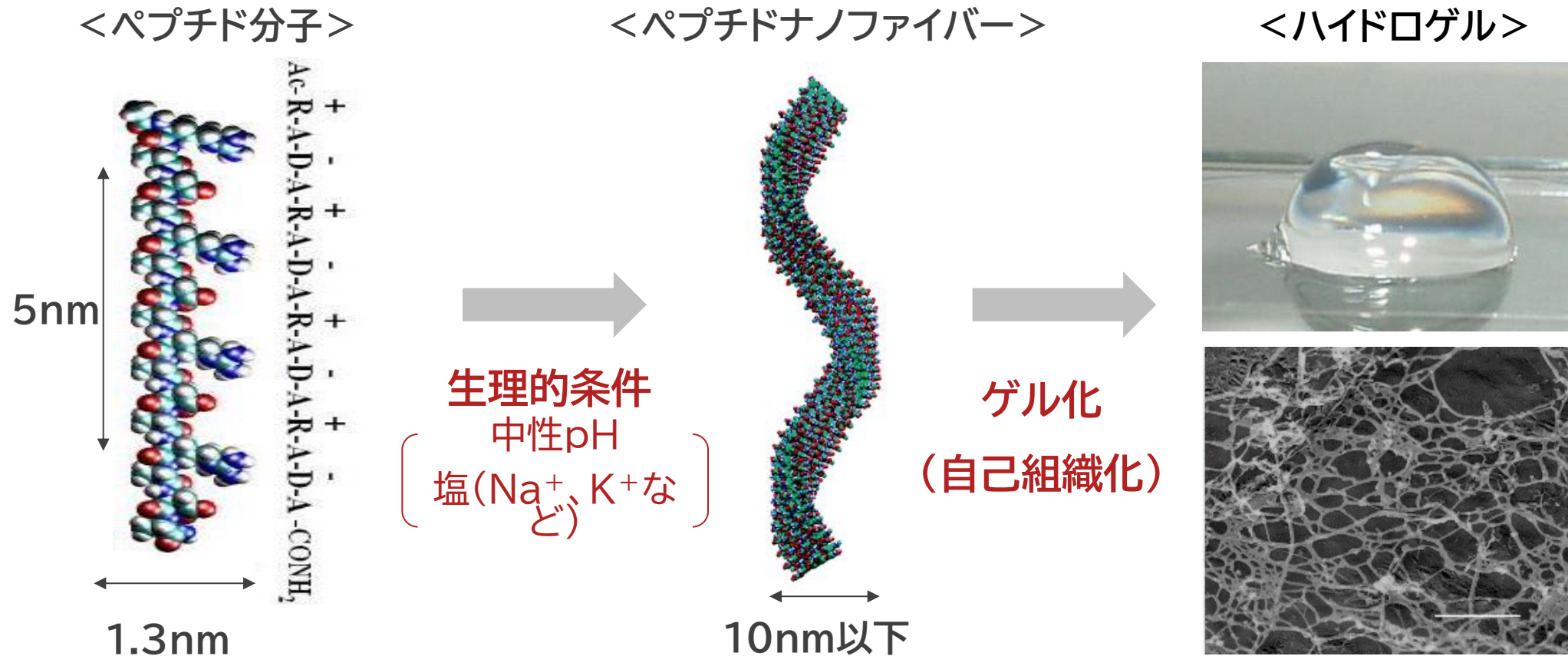
日本・アメリカ・イギリス・フランス・オランダ・
オーストラリア・シンガポール



- Shuguang Zhang (*Head, Molecular Architecture Group, MIT*)
- Alexander Rich (*Professor, Biophysics, MIT and Harvard Medical School*)
- Robert S. Langer (*Professor, Chemical Engineering, MIT*)
- etc.

コア技術「自己組織化ペプチド」

生理的条件下(人体内など)に置くことで、瞬時に**ナノファイバーを形成しゲル化する**ペプチド。
その三次元構造は天然の**細胞外マトリックス(ECM、コラーゲンなど)**と酷似しており、多数のヒトの細胞の増殖を支える**「足場素材」としての機能**を持つ。シンプルな素材で複雑な機能を持たせることができる**ユニークな技術**。



「自己組織化ペプチド」の技術優位性

自己組織化ペプチドは、人工製品と生物由来製品の良さをあわせ持つ医療用途に適したバイオマテリアル。

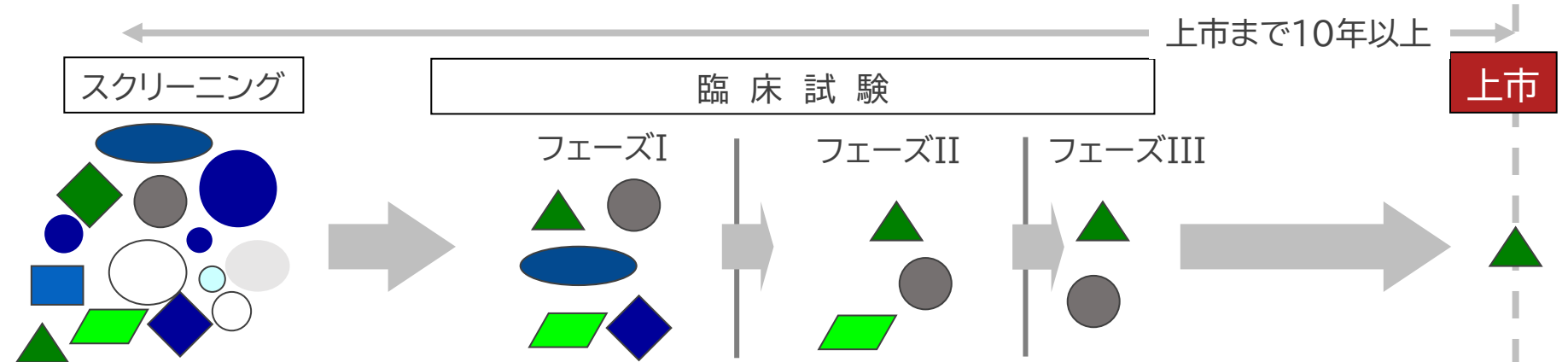
項目		人工製品	自己組織化ペプチド	生物由来製品
安全性 (感染リスク)	狂牛病などのウイルスを含まない。	○	○	×
生体適合性	人体になじみ、炎症などを起こさない。	×	○	○
生分解性	いずれ分解され、体外に排出され、体内に残らない。	×	○	○
拡張性	用途に応じて、様々なバリエーションが作れる。	○	○	×
品質の安定性	同じ品質で、大量に作れる。ばらつきによる不具合が起きない。	○	○	×
例		ポリマー、セラミック、アパタイトなど		フィブリン、コラーゲン、ヒアルロン酸など

自社開発製品のため、収益を可能な限り確保するモデル

医薬品の開発: 臨床試験も長く、上市まで時間・コストがかかる。1つ1つ物質が違うため応用が効かない。

一般モデル

- ・ ライセンスアウトが必須
- ・ 収益の大部分が外部に流出

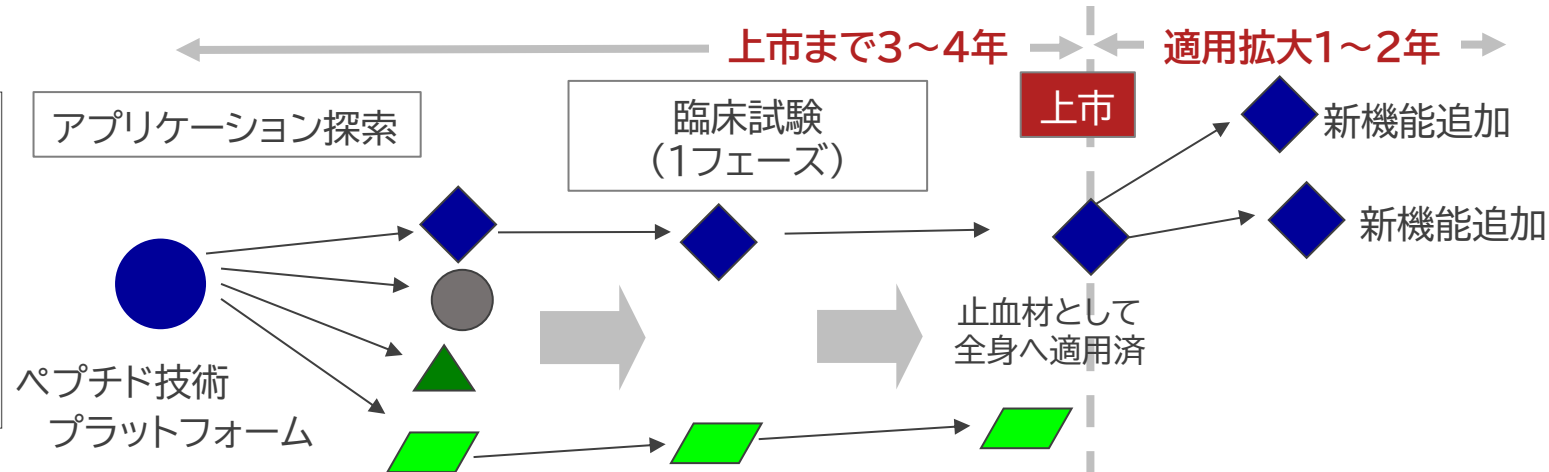


医療機器としての開発: 上市までの開発コストが小さく、さらに適用拡大によりニーズの高い用途を継続追加。



当社モデル

- ・ 自社で上市まで可能
- ・ 既に全身で使われているため適用拡大が容易
- ・ 収益のアップサイドが全て当社に残る



製品のグローバル展開

すでに日、米、欧の三極で上市製品を有し、開発リスクは小さい。
先行地域の成功事例をほか地域に適用し、市場リスクを最小化。



本資料の取り扱いについて

本資料は、株式会社スリー・ディー・マトリックス(以下、当社という)をご理解いただくために作成されたものであり、投資勧誘を目的に作成されたものではありません。

本資料は当社の事業及び業界動向についての当社による現在の予定、推定、実績み又は予想に基づいた将来の展望についても言及しています。これらの将来の展望に関する表明は様々なリスクや不確かさが内在しております。既に知られたもしくは今だに知られていないリスク、不確かさその他の要因が、将来の展望に対する表明に含まれる事柄と異なる結果を引き起こさないとも限りません。当社は将来の展望に対する表明及び予想が正しいと約束することはできず、結果は将来の展望と著しく異なるか、更に悪いことも有り得ます。

本資料における将来の展望に関する表明は、本資料の作成時点において当社が入手し得る情報を踏まえたものであり、法令または取引所規則により開示義務を負う場合を除き、将来の出来事や状況を反映して将来の展望に関するいかなる表明の記載をも更新し、変更するものではありません。